

イエス・キリストの洗礼

創世記 17:9～11

マルコによる福音書 1:9～11

人生ある程度生きてみると、濡れ衣を着せられた経験または泥をかぶる役割をしたことがあるかもしれませんが、それは実に悔しいものでずっと心の底に凝結していることがあります。また逆に人に対して濡れ衣を着せた或いは泥をかぶせたとことに対する決りの悪さもなかなか消える思いではないでしょう。イエス・キリストの十字架は本人が無罪であるにもかかわらず、罪をかぶせられたわけですから冤罪みたいなものでありもし自分がそのように処されれば実に悔しいものであります。キリストの人生においてその無罪にもかかわらず罪を負ったというのは何も終わりの十字架だけではありません。公生涯の初め、すなわちキリストご自身が洗礼を受けられた時にも、すでにそれが示されています。洗礼は罪を洗い清めるという儀式です。ならば罪がないものは洗礼を受ける必要がないのではないのでしょうか。キリストが洗礼を受ける必要はどこにあったのでしょうか。無罪である神の子が、あえて私どもと同じ罪人として洗礼を受けられたことと思ってみましょう。ヨハネが活躍していたころ、ご自身の故郷のガリラヤのナザレからそれほど遠くないところのヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられました。ガリラヤ地方はヨルダン川の上流の方なので、川幅も狭くあまり深くなかったかもしれません。そこは今日キリストが洗礼を受けられた場所として観光地の一つになっています。私は一度訪れたことがあります。丁度そこで洗礼式が行われており、白いガウンを着たおそらく司祭と白い服を着た受洗者がいました。受洗者は全身を水の中に沈めそして立ち上がりました。おそらくヨハネの洗礼もそのように行われ、イエス様もそのようにくけられたのでしょう。罪に死にそして新しい人になって甦ることを象徴したものです。川辺に近づくとなマズが寄ってきました。おそらく餌をもらっているのでしょう。川の中ほどではカワウソが気持ちよさそうに泳いでいました。近くの売店では瓶にヨルダン川の水が売られており、観光客の中にはペットボトルで水を汲んでいるものもありました。

イエス・キリストが洗礼を受けられた時にはもちろん売店もなければナマズも寄ってこなかったでしょう。カワウソはいたかどうかわかりませんが。ただ多くの人が次々にそこで洗礼を受け、その罪びとに混ざってイエス様も洗礼を受けられたということです。これから洗礼を授ける立場の教祖みたいな先生が巷の人々に混ざって洗礼を受けることから始まるのです。それも当時ヨハネはかなり人気のあった指導者ですからやや遅れてでてきたイエス様に従うグループの人たちにとっては、イエス様がヨハネから洗礼を受けたということがヨハネに従うグループの人たちを面白くないと思わせることがあったかもしれません。

私は洗礼を滴礼（全身を浸すのではなく頭の上に三回或いは一回水をつける）で受けましたが、ここにおられる多くの方もそうであるかもしれません。勿論今日でも全身の洗礼もありますが。イエス様がヨルダン川に沈みそこから上がると、上から霊が下る、というのが上下に対抗する垂直な動的出来事が目に浮かびます。天が裂けたのです。天とは神様がおられるところです。そういえばイエス様が十字架にかかれて死なれたときにも天が裂けたことを思い出します。その時にも人の声ですが「本当にこの人は神の子であった」というのがありました。天が裂けるというのは何を意味しているのでしょうか。天が神様のおられるところなら地は人が住んでいるところです。基本的に言えば天と地は人間の罪のために断絶していました。しかしその天が裂けたというのはそして霊が下ったというのは神と人との和解の出来事です。イエス・キリストが罪人として洗礼を受けることによって神の側から地上にラブコールが届き、断絶状態になっていた天と地（神と人）の間が保たれた、イエス・キリストによって仲介されたということです。霊が下る、というのは神さまご自身が先に天から地上に訪れてくださるということです。霊が下るのがハトにたとえられています。皆さんはハトと言うとどのようなイメージがおありでしょうか。平和のシンボル、創世記で洪水の後に水が引いたことをオリーブをくわえて知らせるハト。私は数日前にハトというのをネットで検索したら「ハト被害」「ハトの糞」などがずらりと出て来ました。現代の日本人にとってハトというのがかつてのよな平和の象徴として愛されてきた鳥とは違う「害鳥」であるような感じで

した。また私が大阪にいた時に、料理教室に行ったときに一つの課題としてハトの料理がありました。テキストの説明だけで自分で家で作ってレポートしなさい、というもの出したが、ハトの肉など手に入るのですかと尋ねたら、インターネットで翌日か2, 3日後には届くでしょうという答えが返ってきました。テキストを見たら結構ハトの料理が多く、フランスではそのために飼育もされているともことでした。イエス様がお生まれになってご両親が神殿にそのささげものを奉納する折に、ユダヤの規定通りに山鳩や家鳩を持って行ったのが聖書には記されています。おそらく昔のイスラエルの人たちも鳩を食べていたことでしょう。聖書では山鳩と家鳩が別の言葉で出て来ますが英語でも区別されることが多いです。イエス・キリストの洗礼の場面は多くの画家たちのモチーフになっていますが、そこでは大抵白いハトが描かれています。原文でもこのハトは山鳩やキジバトではない鳩を示す言葉でした。霊が下るといのはハトがスムーズに上から降ってくるような感じであったのでしょうか。イエス様は上を向いて、父なる神様のおられる天を見上げてその降下ごらんになったのでしょうか。すると同時に天からは声も聞こえてきたのです。十字架で天が真っ二つに裂けたときにはそれを見た百卒長の人の声でしたが、ここでは天からの神様の声です。なぜ神さまの声かと言うとイエス様に対し「これは私の愛する子」と言っているからです。もちろん父が子を愛するというのは親の愛を思い浮かべますが、ここではそれ以上の神の愛です。神の愛で愛された実の子であるキリスト。その実子を地上に送ることに満足している、この子の洗礼をよく思っているということです。罪もない神の子が洗礼を受けるのが不合理だなんて言わないのです。このことは私の心に適っている、私の思いに即しているということです。大切な御子が罪人として洗礼を受けることを悔しがらないで喜んでくださる、そのような広くて深いのが神様の愛です。旧約では信仰の父アブラハムが自分の大切な子であるイサクを神様に捧げようとしたことがありました。聖書ではその時のアブラハムの心境は知れされていません。神の御命令によって実子をささげると感じ、困惑などは憶測するしかないのです。私どもがご自身の大切な御子をこの世に捧げると決意した父なる神様のお気持ちはいかがであったのでしょうか。その御子の公生涯の始めの出来事を父なる神様は良しとされ喜んでくださったのです。先ほども出て来ましたがアブラハムが神様に選ばれた者として、その神との関係の約束で割礼を受けますが、その末裔のイスラエルもそれに倣って割礼を受ける頃が神の子となるというように理解しています。しかしわたしどもキリスト者は体に割礼を受ける必要はありません。むしろ心の割礼が必要であり、その表れとして洗礼を受けさせていただくのです。本来なら受ける必要のないキリストが敢えて私たちのために受けてくださった洗礼です。私ども人間こそ受けなければならない存在です。

人生において、悔い改めは何度も行いますが、洗礼は一回きりです。自分自身が罪を犯したと自覚した時、あるいは神から逸れた道を歩んでしまったと思った時、洗礼を受けたこと、信仰告白をしたことを思い起こして神様に立ち返るのです。キリストの謙りによってヨハネより受けられた洗礼は神と人とも和解の出来事です。天が裂けた、そして霊なる神が人の住む地上に下ってきてくださったのです。イエス・キリストの名において洗礼を受けたものは御子によって神の子とされるのです。洗礼は慈愛に満ちた神さまのお招きであり私どもの応答なのです。ここに神と人との断絶がイエス・キリストという結合点によって再び回復されるのです。